

グアテマラ高地におけるマヤ儀礼と チマン（儀礼執行者）のイニシエーション

稲村哲也¹⁾・市木尚利²⁾・アラン・ハイメ³⁾・木村友美⁴⁾

Maya Ritual and its Initiation of a *Chimán* (Ritualist) in Guatemalan Highlands

Tetsuya INAMURA, Naotoshi ICHIKI, Alan JAIME, Yumi KIMURA

要 旨

本稿では、グアテマラ高地のマヤ民族のコミュニティのひとつチチカステナンゴにおける二つのタイプの儀礼について報告する。その一つは、聖地パスクアル・アバップで、筆者の一人のアラン・ハイメの良き将来のため、チマン（儀礼執行者）に執行してもらった儀礼である。彼への聞きとりにより、儀礼の内容、供物のリストとその意味についての知見を得ることができた。また、儀礼の場の配置について図を作成した。これは、チマンが信者の依頼を受けて行う通常の利礼のひとつの事例である。もう一つは、チマンになるために受けたイニシエーション儀礼である。私たちは、偶然の幸運によって知り合った若い女性が、年長のチマンから力を授かる儀礼に参加することができた。この一連の儀礼は、彼女の家での儀礼と聖地ポコヒル山で執行された儀礼とで構成された。私たちは、その儀礼の場の図を作成し、儀礼の一部始終を観察した。この二つの儀礼から、マヤの信仰の概要を知ることができる。

ABSTRACT

This article reports 2 types of Mayan rituals in Chichicastenango, one of the Mayan communities in the Guatemala highlands. Amongst them is a ritual performed by a *chimán* (Mayan ritualist) at a sacred ground, Pascual Abaj, for one of the authors, Alan Jaime. The information about the ritual together with its items and offerings were identified through an interview with him. The layout of the ritual placement has also been recorded. This rite is one example of an everyday ritual performed by the Maya *chimán* with the request of the followers. Another ritual introduced, is an initiation for a lady to become a ritualist. The authors, coincidentally, were fortunate to encounter and join the ritual of a young lady to become a *chimán*, who received the power from a senior ritualist. The entire process of the rite was composed of two parts: One held at her home and the other held at the saint mountain Paqojil. We observed the process of both rituals and recorded the layout of the grounds. The operation of the two rituals portrays an overview of the indigenous faith in the Mayan communities.

1 はじめに

筆者らは、科学研究費の新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学—文明創出メカニズムの解明」（代表松本直子）の一環として、2020年2月下旬にグアテマラを訪れた。筆者（稲村）にとっては、1994年以來の約45年ぶりの訪問であり、マヤ文明を受け継ぐ先

住民の信仰と儀礼などに関する研究の再開が目的であった。主な調査地はグアテマラ中西部高地のマヤ系民族キチェの2つのコミュニティで、一つは筆者が以前調査を行ったスニル（本誌別稿を参照）、もう一つが、本稿で報告するサント・トマス・チチカステナンゴ（Santo Tomás Chichicastenango）であった。スニル（Zunil）は人口約1万4000人であるが、チチカステナンゴの現在の人口は14万人をこえており、市のカテゴ

¹⁾ 放送大学特任教授（「人間と文化」コース）

²⁾ 立命館大学非常勤講師

³⁾ 南山大学ほか非常勤講師

⁴⁾ 大阪大学専任講師

リーにはいる。

チチカステナンゴ市は、マヤの「伝統」がよく継承されるコミュニティのひとつとして知られている⁵⁾。45年前の訪問時にも、教会の正面の階段付近に「チマン」と呼ばれる祈祷師（儀礼執行者）が集まり、人々が様々な依頼をして祈祷が行われるのを目にしていた（写真1）。また、丘の上に聖地があり、そこにも人々が集まって儀礼が行なわれていた。

チチカステナンゴには2月23日（日曜日）の昼過ぎに到着した。日曜市の様子を見るとともに、教会前での儀礼がどのようになっていのかを確認し、今後の研究継続のための予備調査を行うことが目的であった。

私たちは、教会正面からほど近いホテルにチェックインし、すぐに教会に向かった。教会前は、仮設テントが立ち並び、トルティージャ（主食であるトウモロコシの平たいパンの一種）を焼く店、日用品を売る店、そして、観光客を主なターゲットにした織物の店などが立ち並んでいた。市場の雰囲気は45年前とそれほど変わっていないように思えた。織物を売る高齢の女主人に話しかけると、彼女は別の村の出身で、母の代から商売を続けており、いくつかの市を巡回して商売をしているそうであった。グアテマラ高地の村々で開かれる市は、それぞれ週の開催日が異なるため、こうしたビジネスが昔も盛んに行われていた⁶⁾。それが今も続いていることがわかった。45年前の写真を見せると、そのなかに知らしき人物を見つけ、たいへん懐かしそうに昔の話をしてくれた。教会に着くと、昔と同じように、その正面階段で儀礼の火が焚かれていた（巻末カラー①）。

私たちは、パスクアル・アバップ（Pascual Abaj）という、丘の上の聖地に行ってみることにした。街路をしばらく歩いて丘の麓にでると、観光客向けのレストランがあって、マヤの文化や信仰を紹介する小さなミュージアムが付随していた（写真2）。そこから丘に向かう上り坂となる。坂を少し登ると、新しく整えられた、聖なる石や十字架が据えられた儀礼場があり、そこでヨーロッパ人観光客に向けた「マヤ儀礼」が終了するところだった（写真3）。観光客がその場を立ち去った時、片づけを始めたチマン（儀礼執行者）らしき女性に「儀礼をやってもらうことができますか」と尋ねると、「この上のほうで今やっているから、そっちで聞いてみたらどう？」という⁷⁾。そこで、私たちは、林のなかに続く坂道を上った。つづら折りの道を30分ほど登ると、丘の尾根に到着した。

林が開かれた空間が広がり、そこには、いくつかの儀礼台が設置されていた。その一つで、若いチマンが



写真1 45年前、教会前で行われていたマヤ儀礼（1974年撮影）



写真2 レストラン付随のミュージアム：マヤ儀礼やカトリック民俗信仰に係る展示（以下2020年撮影）

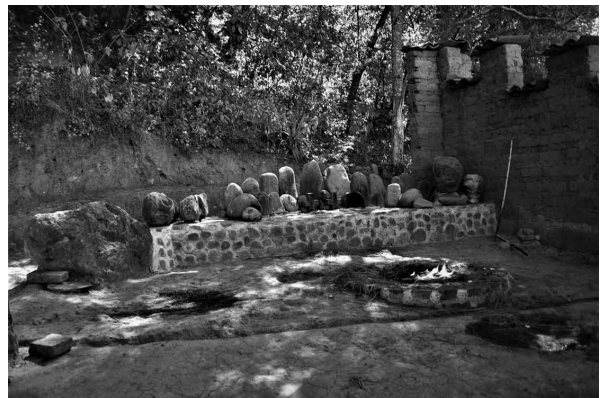


写真3 観光用のマヤ儀礼場：祭壇や円形供物台が配されている。

⁵⁾ そのカトリック教会でキチエの創世神話や年代記を記した「ポボル・ブフ（ウーフ）」が見つかった（レシーノス 1977）。その神話によれば、神々によって、2度の失敗の後、3度目に創造された世界で、人間がトウモロコシから創られた（Thompson 1970：333-335）。

⁶⁾ このような定期市は週単位で村々を巡り、それを通じて単一共同体を越える地域全体が、統合された経済的ネットワークの中に置かれることになる（小泉1995：116）。

⁷⁾ 特殊な場合を除いて、マヤ儀礼を依頼するのは、それほど特別なことではなく、日本人が神社でお祓いを依頼する感覚と似ているようである。



写真4 パスクアル・アバッフ

ひとつの家族にマヤ儀礼を行っていた（写真4）。儀礼の合間に、そのチマンに、アラン（筆者）の将来の成功を願う祈禱をお願いした。チマンは、祈禱を受けていた一家の主人とマヤ語でなにやら相談したあと、その依頼を受諾してくれた⁸⁾。彼は、アティトラン湖の近くの町ソロラから来たチマンで、ソロラの住民に依頼され、ここに来て祈禱を行っていたのである。

儀礼には様々な供物が必要のため、アランが彼と一緒に市場まで買い付けに行くことになった。その間、市木（筆者）が儀礼の場の図面作りの作業を行った。

その間に、不思議なことが起こった。木村（筆者）が、儀礼場の背後の林に入ってしまったとき、3匹の犬に囲まれて吠えかかれた。その声を聞いて、稲村が駆けつけると、一人の女性が現れて犬たちを追い払ってくれた。その女性が「家に飲み物があるよ」と言うので、ついていくと、梢の間に、七面鳥の小屋、台所、丸い儀礼台の一面などが集まった住居が現れた。そこでトイレを借り、飲み物をもらった。トマサというその女性は、「夕方5時に家でマリンバ（木琴）の演奏をするから、聞きにきてもいいよ」と言う。なにやら、翌日に行う儀礼の前夜祭のようだった。

パスクアル・アバッフでの祈禱は1時間余り続き、5時頃に終了した。儀礼終了後、彼女の家を訪問すると、マリンバの演奏が行われていた。トマサさんに、何があるのかと詳しく聞いてみると、彼女の妹エレナがチマンになるため、師匠から力を授かる儀礼を翌日にやるのだという。あろうことか、私たちが招待されたのは、チマンになるためのイニシエーション（受任）儀礼であった。

翌朝、彼女たちの家を訪れ、一連の儀礼に参加させていただいた。予備調査のつもりで訪問したチチカステナンゴであったが、信じがたい幸運が重なり、マヤの儀礼の実質的な調査を行うことができたのである⁹⁾。

本稿では、チチカステナンゴの概要に触れたあと、チマンが依頼を受けて行う通常の儀礼について報告し、その後、チマンのイニシエーション儀礼の事例を

報告し、マヤの信仰について若干の分析を行いたい。

2 チチカステナンゴの概要

2-1 地理・気候と歴史の概要

チチカステナンゴは、中西部高地にあるキチエ県南部で、標高2070m、北緯14度56分30秒、西経91度06分42秒に位置し、グアテマラの首都グアテマラシティからは約145kmの距離にある（以下、De León y de León 2010）。環太平洋造山帯にあたるため、火山が多く連なる地域である。チチカステナンゴとその周囲は、標高1500mから2400mに位置し、変化に富む山岳地帯となっている。

雨季と乾季の区分があり熱帯性の気候の特徴もみられるが、高原地帯にあるため温帯性の冷涼さもあわせもつ。雨季の終わりの3月初旬から5月上旬までは温暖で、平均気温は14度から18度程度、最高気温は26度ほどとなる。9月以降は冷涼で、平均気温は12度から15度ほどとなり、最も寒い11月から1月の時期の最低気温は4度から6度である。降水量は1000mmから2000mmである。

チチカステナンゴの地名は*Tzitzicastli*に由来している。その意味はチチカステ（イラクサの一種）に囲まれている場所とされている。17世紀の先住民の史料である『カクチケル年代記』に従えば、この地域には、先スペイン期の1450年頃までは、2つのマヤ系民族集団のキチエとカクチケルが良好な関係を築き、同盟関係にあったが、1450年から1475年の間に戦争が二度起こった。それまではカクチケルが現在のチチカステナンゴを拠点にしていたが、この二度の戦争で勢力が衰え、別の地域へと移動せざるをえなくなり、代わってキチエが治めるようになった。1539年にはスペイン人たちが入植をはじめ、1549年以降にはドミニコ会修道士たちがレドゥクションを設置して支配するようになった。その後、19世紀初頭のスペインからの独立を受け、グアテマラ共和国の一地域として統治され、現在に至っている。

2-2 1930年代初頭のチチカステナンゴ

チチカステナンゴについては、1931～32年にBunzelによって詳細な民族誌的研究が行われている（Bunzel 1952）。そこで、その記述に基づいて、当時の概況についてまとめておく（現在形で記述する）。

チチカステナンゴには、キチエ語を話す先住民を中心に、約25,000人住み、プエブロ（市街地）と64のカントン（周辺地区）に分かれている。チチカステナンゴの領域は、耕地と牧草地と散在する森林からなり、肥料を利用しない農耕システムのため、耕地は収穫の後、休耕地にされる。その結果、耕地は分散している。主要作物は、トウモロコシ、数種のマメ、カボチ

⁸⁾ おそらく、私たちへの儀礼を執行すればソロラへ帰る時間が遅くなるため、その家族の承諾を得ていたのだと推測された。

⁹⁾ チマンの師をはじめ、参列者の皆さんに温かく受け入れていただき、自由に撮影することや質問をすることも許された。

ヤ、それにジャガイモである。寒冷地では少量のコムギも栽培されている。周辺部の大きな農地では、余剰の商品作物、すなわち、マメ、ジャガイモ、トウモロコシが栽培され、卵、薪、松脂、ブタ、羊毛なども生産されている。

プエブロの街路は石畳で、ほぼ中央に広い広場があり、教会と回廊のある建物がその周辺を囲んでいる。その広場で毎週日曜日に市が開かれる。広場の外側は規則的な街路が広がり、広場に近い街路はラディーノ¹⁰⁾の家々に占められている。先住民でもプエブロに家を持つものもいるが、彼らは通常はそこに住んでおらず、普段はモンテ（山）、すなわち、祖先の土地にある家に住んでいる。しかし、プエブロはすべての商業、政治、宗教活動の中心であり、彼らは、単調なカントンでの生活と、刺激的で陽気で変化に満ちたプエブロでの生活の間を往復している。

先住民がプエブロに住んでいないという事実は、チチカステナンゴの組織の二重性を支えている。チチカステナンゴには、ラディーノ・アルカルデ（村長）とインディオ（先住民）・アルカルデとが存在し、各個人はそのどちらかの統治下に属している。ラディーノ・アルカルデは、行政官でもあり判事である。彼は、ラディーノの住民に係る紛争を解決する。彼は、労役、軍事、税金、法律などを、上位の行政権威から受けて実施するが、インディオ住民に係る場合は、それをインディオ・アルカルデに委嘱する。このような枠組みのなかで、インディオ住民はかなりの程度の政治的自立性を維持し、インディオ住民のみに関する問題においては、比較的干渉から免れている。2人のインディオ・アルカルデの下に階梯的な組織がある。その地位は、バラと呼ばれる杖によって表される。

このインディオ・アルカルデ以下の政治的役職はカルゴとも呼ばれる。カトリックの聖人信仰と関わるコフラディア（信徒組織）の役職もカルゴと呼ばれ、この2つの階梯が組み合わされたカルゴ・システムによって、先住民コミュニティは組織化されている（本誌別稿を参照）。チチカステナンゴには14のコフラディアがあり、そのうちの3つは8人の成員をもち、それ以外は6人の成員をもっている。

カルゴの務めはコミュニティへの奉仕として無報酬で行われ、毎年交代する。個人は、政治と宗教のカルゴを相互に務めながら、カルゴ・システムの階梯を上っていく。すべてのカルゴを完了した者はプリンシパル（長老）として、高い権威を得る。各カントンにプリンシパルが存在し、その上位に、プエブロのプリンシパルがいて、彼らが中心となって、カルゴの受任者を選任する。

2-3 チチカステナンゴの現状：人口・民族構成・産業と産業

チチカステナンゴの現在の人口は141,567人で、中心市街の人口は2,500人ほどである（以下、Instituto Nacional de Estadística 2018、De León y De León 2010）。1930年代初頭と比べて約5.7倍に増加している。1994年には人口が75,797人（男性36,608人、女性は39,189人）であったが、それに比べると、1.8倍ほどの増加がみられる。その要因として、仕事、結婚、ビジネスなどのために周辺の農村からの人口流入が考えられる。よりよい教育などを求めて他の県へ移動する人々もいるが、全体としてチチカステナンゴでは過密化が進んでいると言える。

民族構成は、マヤ系先住民のキチェが139,900人で、全人口の98%を占めている。次に多いのはラディーノの1,478人で、全体の1%である。そのほかにガリフナ、アフリカ系、外国人、シンカが居住しているが、それらをあわせても1%に満たない¹¹⁾。

主な産業は農業であり、トウモロコシ、モモ、セイヨウスモモ、フリホル豆などを生産している。家畜は自家用に飼われている。パン製造も盛んである。

チチカステナンゴは、伝統的な文化を維持する先住民のコミュニティとして、観光地としても有名である。コロナウィルスの感染拡大以前は、グアテマラ全体で300万から400万人ほどの観光客を受け入れていたが、チチカステナンゴも、外国からの観光客を多く受け入れてきた。パスクアル・アバップのような先住民の文化遺産、チチカステナンゴ市内の民芸品市場、年中行事として開催される祭りを観光資源としており観光業が盛んになっている。ただし、現在は、コロナウィルスの感染が拡大し、グアテマラ全体で観光客の大幅な減少の状況にある。

3 パスクアル・アバップにおけるマヤ儀礼

3-1 チマン（儀礼執行者）とマヤ儀礼：聞き取りを中心に

パスクアル・アバップでのアラン（筆者）のための祈禱儀礼を執行したチマンのA氏は、サン・ホセ・デ・ラ・ラグーナで生まれ、現在21歳だが、17歳からマヤの儀礼を行ってきた。彼の祖父もマヤのチマンであった。

マヤ暦¹²⁾の各日はナワル（*Nahual*）と呼ばれ、それぞれ固有の特徴をもち（本稿5-2を参照）、チマンになる運命は、その生まれた日によってあらかじめ定められている。男性も女性も、チマンになるのにふさわしい日を持っているならば、マヤ儀礼を行うことがで

¹⁰⁾ ラディーノは、メキシコ等におけるメスティーツ（スペイン系子孫と先住民との混血、ただし、むしろ先住民との文化的な差異による）に近いが、グアテマラの歴史的経緯から、ヨーロッパ系白人とメスティーツを包括した「非先住民」を意味する（小泉1995、桜井2018）。

¹¹⁾ ガリフナは、マヤ諸語とは異なる先住民の言語、またそれを母語とする人々のことで、現在は100名余りの少数。シンカは、小アンティル諸島の先住民とアフリカ黒人の混血によって形成された民族とその言語。グアテマラには、リビングストンを中心に約2500人が居住する（八杉2018）。

きる。しかしそうではない人は、ロウソクを供物として捧げることで、決して火を扱うことはできない。それはよくないことで、霊たちを怒らせ、病の原因になってしまう。

チマンは言葉をつかかって霊的存在と人々を導いていく。A氏は出身地であるソロラ以外に、他のコミュニティの聖地でも仕事をしている¹²⁾。また、信者の家でも儀礼をすることができる。依頼者の抱える問題に従って、病、ビジネス、旅行などについて儀礼をするために、チマンは、それに合致したナワルの日を選ぶのである。

儀礼の基本的なプロセスは共通しているが、すべての儀礼が同じではない。例えば、雄鶏が、「健康祈願」の守護として、病氣平癒、無病・息災を目的に使われる。その他の供物としてはトモロコシが使われ、縁結びや、無病や商売繁盛を目的とする。

A氏はまた、サン・シモン (San Simón)、マシモン (Maximón) あるいはドン・ペドロ (Don Pedro) のような様々な名前をもつ重要な存在に帰依している。それらの信仰は共通しているが、ローカルな違いもある。サン・ルカス・トゥリマン (San Lucas Tulimán) にはサン・シモン・ネグロ・デ・ラ・ノチェ (San Simón Negro de la Noche) すなわち「夜の黒サン・シモン」がある。それは、人が夜道を歩くときに守ってくれるのに有効な「盾」となるものである。それは、エルマーノ・シモン・ネグロ (Hermano Simón Negro) すなわち「兄弟である黒シモン」としても知られている。ルイスにとって最も重要な「サン・シモン」は、サンチアゴ・アティトランのマシモンで、キチェ語でラクマン・ラクマツウン・ラクマルシモン (*Lakman Lakmatsún Lakmar Simón*)、すなわち「偉大な祖父のシモン」なのである。

3-2 儀礼のプロセスと供物

(1) 儀礼の概要とプロセス

アラン（筆者）の将来の成功を願って行われたパスクアル・アバップでの儀礼は、主祭壇とそれに対面するケマデーロ (quemadero)、すなわち円形の供物焼き台を使って行われた。基本のプロセスは、チチカステナゴの市場で調達した一連の供物を、慣習に従ってケマデーロに並べて燃やし、チマンが霊的存在（神々・諸精霊など）を呼び出し、祭壇にロウソクを灯して祈禱するというものである。儀礼は、以下のようなプロセスで進行した。

①ケマデーロの準備：チマンは、アラン（依頼者）におおざっぱな手順を説明したあと、ケマデーロに供物を配置してゆく。まず、砂糖で、ケマデーロに円と十字を描き（写真5）、その上から、ポム（マツ

科の実を丸くした香の一種）を置く（写真6）。さらに、薪、香、菓子類、樹皮、ロウソク、卵などの供物を、慣習に従った手順で配置する。

②供物焼きと祈禱：チマンがケマデーロを前にして説明し、供物に火をつけ、霊的存在を呼び出し、祈禱を行う（写真7）。

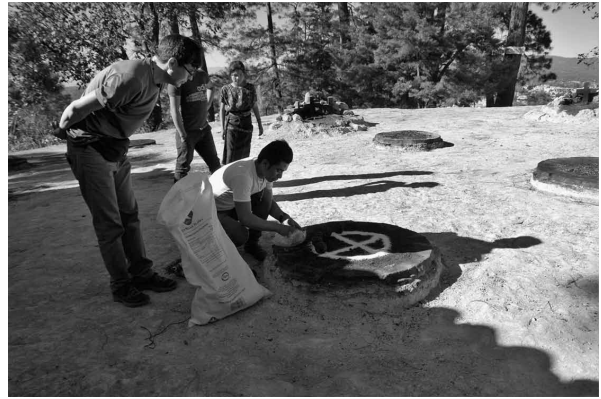


写真5 砂糖で十字を描く

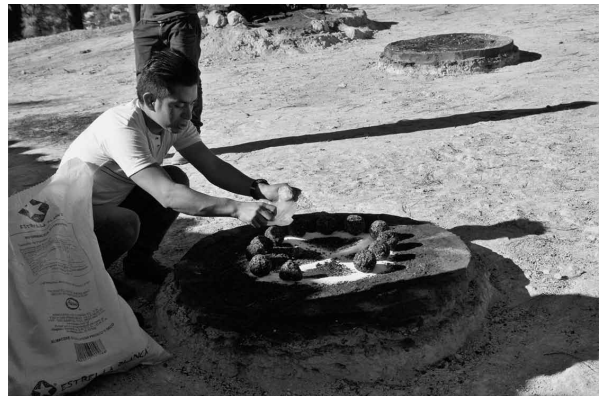


写真6 ポムを供える



写真7 供物に火をつける

¹²⁾ 「ツォルキン暦」とも呼ばれる、20の日の名前（固有のシンボルをもつ）と1～13の数（点と横棒の組み合わせによる20進法のマヤの数字）の順列から成る260日を周期とする暦（Whitlock 1976）。

¹³⁾ サン・ホセ・デ・ラ・ラグーナ、サンチアゴ・アティトラン、サン・ルカス・テナンゴ、ネバフなど。



写真8 主祭壇で祈る



写真9 最後の祈り

③主祭壇に移動し、そこで様々なロウソクを立て、さらに祈祷を続ける（写真8）。

④ケマデーロに戻り、祈祷を続け、供物を完全に焼き、儀礼は終了する（写真9）。

(2) 儀礼の供物とその効用

儀礼に込められた願いと効用は、儀礼に使われる様々な供物に表象されていると言える。以下は、供物とその意味、効用などである。（括弧内はキチェ語は斜体、スペイン語は正体で表記する。）

<様々な色の聖水>

- 「アウマシモンの水」(Agua *Aumaximón*)：緑色の液体で健康を守るのに有用
- 「フロリダの水」(Agua Florida)：緑色の液体であり、心身を清めるのに有用
- 「レティロの水」(Agua de Retiro)：黄色の液体であり、悪いものを除くのに有用
- 「口封じの水」(Agua Tapaboca)：紫色の液体であり、敵の悪口を沈黙させるのに有用

<様々な色と形のソウソク（巻末カラー②）>

- 九色の細身の小さなロウソク：
 - ・ 橙色：神経 (*nervio*) のため

- ・ 空色：1月あるいは良き年始のため
- ・ 黄色：幸せのため
- ・ 緑色：金銭のため
- ・ 茶色：敵に対抗するため
- ・ 青色：幸運のため
- ・ 紫色：強化、生活のため
- ・ 白色：仕事のため

- 黒ロウソク4本：敵から身を守るため
- 発火型のロウソク（動物の脂でつくられたもの）：祖父母（祖先）の霊に有用
- 太くて長いロウソク（赤色、黒色あるいは白色）

<香：清め、良いエネルギーをもたらしてくれる>

- ポム (*Pom*)：球形で樹脂を固めた香
- ウィルポ (*Wilpo*)：香木の一種
- 安息香 (*Etoraque*)：芳香性のある練りもの
- チャフ (*Chaj*)：別種の香
- ロメロ (*Romero*)：植物の一種

<その他の供物>

- 砂糖：十字や円を描く
- 鶏の卵6個
- パホリン (*Pajolin*) あるいはコフリン (*Cojlin*)：火の中に放り込むとカサカサと強く音を出す胡麻の一種で、願いを助けてくれる。
- 葉巻タバコ6本
- クシャハ (*Cuxaja*)：火を強めるためのアルコール
- ビール、酒
- チョコレート、キャンディー、糖菓、チューイングガムなどの菓子

3-3 儀礼の場

(1) 祭壇の形態と配置

儀礼の場（写真10）には、今回の儀礼に使われた主祭壇らしき大きな祭壇（祭壇Aとする）と、それ以外に、5つの祭壇が配されている（配置と形態の違いから、祭壇B～Dとする）。また、供物を燃やす円形のケマデーロ（供物焼き台）が合計12ある。

祭壇は以下の4種類に分類される。



写真10 儀礼場の祭壇とケマデーロの配置

祭壇A：縦250cm、横350cm程度の長方形プランをもつ（写真11）。祭壇上には40cmから70cmの不定形な石を中心に弧状に配置されている。その内側に9本の石製十字架をもつ。

祭壇B：縦200cm、横250cm程度の楕円形の低マウンド（図1では、円形のケマデーロと区別するため長方形で表示）。その上に弧状に不定形な石が積み上げられて配置されている。その内側には石製十字架が1本配置されている（写真12）。

祭壇C：縦200cm、横280cm程度の楕円形の低マウンドとその上に弧状に不定形の石が積み上げられて配置されている。その内側には石製十字架が3本配置されている。中央の十字架の前には方形の石壇もみられる（写真13）。

祭壇D：縦200cm、横280cm程度の楕円形の低マウンドとその上に弧状に不定形の石が積み上げられて配置されている。その内側には石製十字架が3本配置されている。中央の十字架の前には石壇が二枚置かれている（写真14）。

(2) ケマデーロ（供物焼き台）の分類

多様な霊的存在への多様な供物を配置し、それらを焼くための円形の台である。儀礼の目的（心願）によって利用するケマデーロが異なるようであるが、こ



写真11 祭壇 A (主祭壇)



写真12 祭壇 B

では、その形状のみに基づいて分類する。それは平面での配置の規則性を考えるうえで重要である。

ケマデーロa：直径140cm程度の円形の平面プランを持つ（写真15）。

ケマデーロb：形態は同じだが直径90cm程度の円形の平面プランを持つ。

(3) 祭壇及びケマデーロの配置（図1）

北東・南西ラインと北西・南東ライン軸にして祭壇とケマデーロが配置されている。二つのラインの交点にケマデーロaがある。このケマデーロaから四方180cmほどのところにケマデーロbが配置されている。そして、ケマデーロbの外側に祭壇A、祭壇C、祭壇D



写真13 祭壇 C



写真14 祭壇 D



写真15 ケマデーロ a

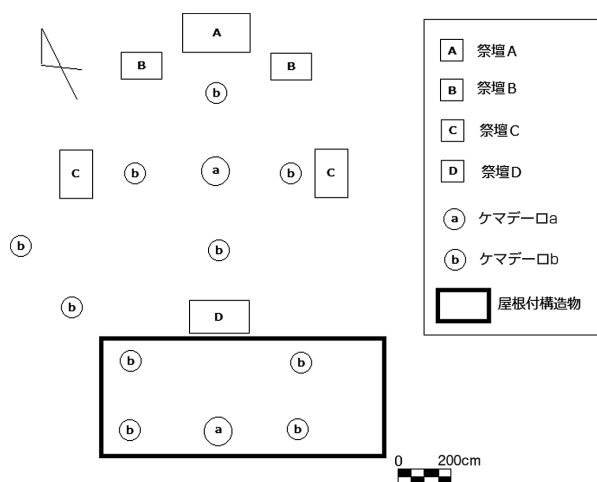


図1 パスクアル・アバップの儀礼
(作図：市木尚利)

が配置されている。また、祭壇Aの左右手前に付随するように祭壇Bが90cmほど離れて配置されている。

配置距離の規則性であるが、ケマデーロaを中心に四方にあるケマデーロbまでの距離は規則的であるが、ケマデーロbから最も近い祭壇の距離は(40cmから150cm程度)やや不規則にみえる。ただし、それは祭壇C、祭壇Dのマウンドが土であるため長年の利用によって削られている可能性がある。マウンドの外縁も不明瞭である。尾根の広さの制約についても考慮する必要がある。

4 チマンのイニシエーション儀礼

4-1 儀礼の概要・アクター及び儀礼の準備

(1) 儀礼の概要

この章では、パスクアル・アバップの裏手の家に住む若い女性エレナ(23歳：当時)が、正式なチマン(祈祷師)となるためのイニシエーション(受任)儀礼について報告する。2020年2月24日と25日に行われたが、私たちは24日の午前(室内)と午後(屋外儀礼場)の儀礼に参加することができた。聞き取りによれば、翌25日はチチカステナンゴの教会で実施された。

この儀礼は2月24日の朝10時頃に始まり、その全行程は長く複雑なプロセスであった。第1日目午前中は、エレナの家で儀礼が行われたが、チマンの師としての長老2人とその妻たちを迎えに行き、家に導き入れることから始まった。特別に飾られた室内の、特別に整えられた祭壇の前で、香を焚き、祈る。様々な霊的な存在(神々・精霊たち)を招き、チマンの師によって、受任者に霊力(エネルギー)が注入されたのである。

午前の儀礼のあと、参会者全員が昼食をとり、車でポコヒル(Poqojil)山の麓に行き、そこか山頂の儀礼場に向かった。そこでは、主祭壇に配置された4つの偶像への儀式を捧げ、ケマデーロで供物を焼き、雄鶏

を生贄として捧げ、マリンバのリズムによって踊りながら儀礼場を周回して儀式は終わった。ケマデーロで供物を焚く儀礼は、前章で報告したプロセスとほぼ共通していた。

家へ帰ると、霊的な存在への感謝を示しながら、閉会の儀式が行われた。翌25日は、キリスト教の神・聖人たちと霊的な存在に供物を捧げ、感謝の意をあらわすために、チチカステナンゴの教会へ行って、儀礼を行った。その後、家へもどってから、エレナのために準備されたケマデーロで、残っていた供物を、残されていた雌鶏と一緒に火に焚いた。この儀式をもって、エレナはチマンとして正式に承認された。

すべての儀礼の間、招かれて儀礼を執行した長老のチマンであるB師とC師は、交代しながらキチュ語で祈り、霊的な存在の呼び出しを行った。長老たちが受任者のエレナにつねに言い重ねていたのは、よく観察し、儀礼のすべての段階に注意を払いなさい、ということだった。

(2) 儀礼を司祭したチマンの長老

B師は60歳になり、チマンとして魂の案内役としての役割を担ってきた。彼が言うには、チマンの役割は、病を治癒することであり、また人を災厄から守ることである。またチマンたちは、ほかの種類の儀礼を行うこともできる。例えば、ラス・ペディダス(Las Pedidas)は、パンを未来の義父・義母に渡す婚約の儀礼である。このような行いには、結婚や未来について対話するために、証人となる二組の男女ペアと一緒にいる必要がある。ただし、すべてのチマンが同じやり方で儀礼を行ことはできないという。

彼が強調するのは、マヤ暦に従って、各人がそれぞれのナワルを持っており、それに応じた特別な形をした石を持っていることであった。どのような人でもチマンのナワルを持てるわけではない。ナワルが人を選び、いつ生まれたかによって、チマンになることができる。特徴的なナワルを保持するチマンとして、彼は、エ(e)と呼ばれている(本稿5-2を参照)。

同師はチチカステナンゴのサント・パードレ・エテルノ(Santo Padre Eterno)のコフラディアの長でもある(当時)。この長はサント・パードレ・エテルノの聖像を自宅で維持管理する。そのため、多くの人々がシナモンと香を供物として捧げに訪れる。この奉仕のために家族全員が協力する。2021年の新年の月(1月)には、他の人がそのカルゴ(役割)を引き継いでいくことになる。

(3) 受任者エレナ

エレナはチチカステナンゴ市のトゥルカフ山の尾根にあるパスクアル・アバップに近い家に住んでいる(写真16)(図2)。エレナの両親はすでに亡くなっていたが、4人の姉妹がいる。同じ家に、祖父母も、その前の世代も居住してきた。祖父母も父母も、農業を営み、主にトウモロコシ、フリホル豆などを栽培し

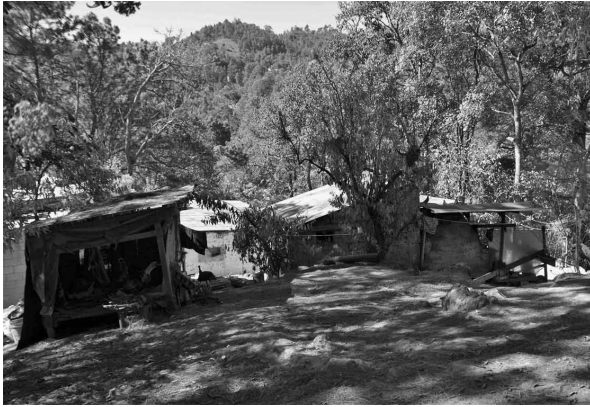
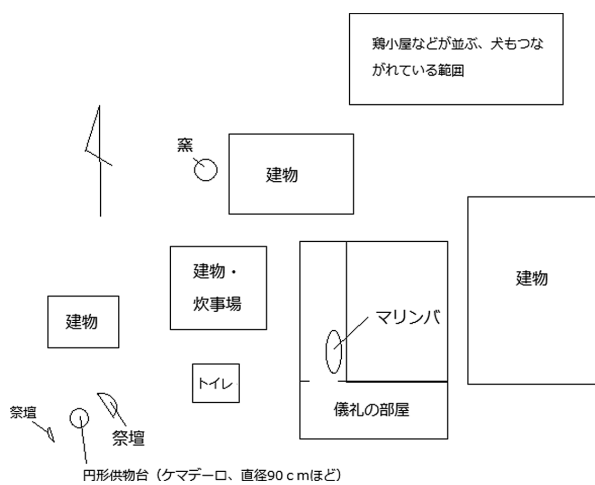


写真16 エレーナの家

図2 儀礼が行われたエレーナの家
(作図：市木尚利)

てきた。

チマンになれるのは、マヤ暦の「13のバツ（糸）」の日に誕生した人だけで、エレーナはその日に生まれた選ばれた人で、チマンの素質もあるのだという。エレーナは、長老のチマンの師の下で、祈祷のやり方やさまざまな知識を学んできた。しかし、正式なチマンになるためには、呪力を授かるための特別な儀礼を受ける必要がある。そのためには、さまざまな準備が必要で、費用もかかる。家族の助けも受けながら、その準備を進め、ついに、その儀礼を受けることが決まったのである。

イニシエーション儀礼では、エレーナは特別な「双頭の鳥」のシンボルをもった服を身につけていた。次第に使われなくなっている昔ながらの服である。同様に、儀礼のために特別な髪型をしていた。

この儀礼全体には長老のチマンへの配慮と注意深い対応が求められる。なぜなら、良いエネルギーを広く広める責任ある案内役を担っているからである。長老たちは、2日間の儀礼を完遂するためにエレーナの家を宿泊することを望み、そのようにした。

(4) 儀礼の供物など

儀礼は供物なしには行えないのであり、一般的に、供物の材料は同じものであるのが習慣となっていた。チマンのイニシエーション儀礼では、祭壇を飾るピシユラク (*Pixlak*) というの植物の葉をトウモロコシの殻で巻いてつくった花飾りを用意する。

イニシエーション儀礼で重要なものとして、赤い布の包みあり、その中には、占い等に使う多くのフリホル豆、20の小石（ナワルの石）、小石像が入っている。介添え女性（チマンの妻）の手助けを受け、エレナがその包を開き、フリホル豆、ナワルの石、小石像を丹念に洗った。それは譲渡の行いのように、彼女は最後にその包みを受け取った。

供物には、雄鶏と雌鶏の一組が含まれていた。それらは、午前の儀礼の時には長老のチマンたちの前に置かれたテーブルの脚に括りつけられていた。午後に行われたポコヒル山の頂での儀礼では雄鶏が生贄にされた。雄鶏の体の動きに、エネルギーの強さが表されるのだという。

午後のポコヒル山の儀礼におけるケマデーロで焚かれる供物は、前章で報告したものと同様である。長老によれば、基本的には7色のロウソクが必要であり、「7つの色、7つのナワル、7つの力、7つのエネルギーである」という。緑色は財産（お金）を、青色は天空を、空色は1月あるいは新年を、黄色は人の守護を、ピンク色は旅を、紫色は恋愛を、赤色は愛を示している。様々なロウソクのほかに、ポム (*Pom*)、チャフ (*Chaj*) あるいはオコーテ (*Ocote*) などの香、砂糖、糖菓、ビール、酒などが供物である。供物の火焚きには、様々な神聖な液体が使われるが、今回は主にアグア・フロリダ (*Agua Florida*) が使われた。

4-2 屋内での儀礼のプロセス

(1) 儀礼のための様々な準備

一人のチマンを聖なるものとする儀礼は様々な準備が必要である。この二日の儀礼のために、兄弟姉妹とその配偶者や甥・姪などが集まり、準備に協力する。例えば、マリンバや様々な物品の運搬を手伝ったり、料理や飲み物をふるまったり、必要な供物を整理してならべたりするのである。

マヤの伝統によれば、このようなチマンのイニシエーション儀礼のためには、雄鶏と雌鶏を1羽ずつあらかじめ準備しておかなければならない。そのため、2羽の鶏が儀礼の部屋のテーブルに繋がれた。犠牲にされる鶏の性別は、チマンの性別によって異なる。今回の場合、エレーナは女性であるが、反対の性の鶏（雄鶏）が生贄として捧げられる。

午後の儀礼は、チチカステナンゴでもっとも高い場所にあるポコヒル山の頂へのぼるため、参加者が移動するのに必要なピックアップ・トラック三台が用意された。

(2) 食事の準備

招待された人々が到着する前に、とりわけ集中して行われていたのが料理であった。例えば、エレーナの姉妹の一人は、パトゥルクというカントン（区）に住んでいるが、朝早くからエレーナの家に来て、料理の準備を行っていた。

昼食や夕食で、招待された人々をもてなすために多くのタマル (*tamal*)¹⁴⁾ を調理する。手伝いの女性たちは、トウモロコシを挽いて練ったものを大量に準備する(写真17)。トウモロコシを細かく砕くために使われる伝統的な道具はメタテ (*metate*) である(写真18)が、現在は機械で製粉されたトウモロコシ粉を使うことも多い。

同時に、トウモロコシの粉で作る飲み物であるアトル (*atol*) が用意され、すべての招待客、とりわけ年配のチマンたちを歓迎するためにふるまわれる(写真19)。この儀礼的な飲み物は、キチェ語ではムルル (*mulul*) というヒョウタン製の小さな碗に入れてふるまわれる(写真20)。さらに、砂糖を入れないチリペイコ (*chilipeiko*) という茶も招待客の好みに応じてふるまわれる。

同様に、スープの準備にとりかかり、牛肉が主な材料となる。一般的には、鶏肉がもっとも消費されているものであり、エレーナの家の石囲いで鶏が飼育されている。七面鳥やカモも数羽飼育されている(写真21)。家禽は必要に応じて売られるようで、例えば、大きめの雄鶏は150ケツアル、雌鶏は100ケツアルで売られる。



写真19 アトレの準備



写真17 タマルの準備



写真20 ヒョウタン容器



写真18 メタテ (石臼)



写真21 七面鳥

¹⁴⁾ 挽いたトウモロコシの塊をトウモロコシの殻やバナナの葉で包んで蒸す、グアテマラの主要な調理の一つ。

コンの長老2人とその妻たちが椅子に座った（写真24）。

- ・B師が祈りの言葉を唱え始めた。C師はハミングのような祈りを続けた。
- ・チマンとなるエレーナと介添えの女性が、チマンの師らのテーブル前に莫蔭を敷き正座をした。
- ・ときどき、両師は役割を交代する。ここで、B師はハミングの祈りをしながら小コップを5つ取り出し、テーブルの上に置く。C師は諸霊の呼び出しと祈りを続ける。
- ・家族の男性（義兄）が蒸留酒をあけ、3つのコップに注ぐ。C師がコップを受け取り、数滴大地へたらす。
- ・義兄が参列者に酒を配る。参列者は祭壇へ行き、祭壇におかれた石に酒を注ぐ。

10:45～ 食事

- ・トルティーヤ、フリホル、スクランブル・エッグが準備され、まず長老らに配られ、次いで、参列者に振る舞われる。
- ・食事をとる。エレーナと介添え女性は正座したまま食事をする。

11:21～ ピシュラック（花）の準備

- ・両師は座る位置を交代。B師が呼び出しと祈りの言葉を続け、C師はハミングのような祈りを続ける。
- ・参会者の数名が香をたいて部屋に入り、石製十字架を布から取り出して祭壇前に設置する。
- ・参列者らが莫蔭を敷いて、供物として、ピシュラック（pishlak）をトウモロコシの殻で巻いていく（写真25）。

11:38～ 赤い包の呪物の清め

- ・長老のB師はビールを赤い風呂敷にかける。風呂敷には赤色のフリホル豆と小石像、ナワルの小石が包まれている。
- ・ニワトリが2羽（白と茶1羽ずつ）テーブル下に括られる。



写真24 儀礼の開始

- ・ピシュラックをテーブルの供物の上に置く。
- ・ざるに入れた花びらを祭壇にまき、酒を供物にかける。
- ・エレーナと介添え女性は跪いて長老の言葉をうける。エレーナは参列者をまわり、（肩に手を置いて）あいさつをする。
- ・布包みからフリホル豆、小石像、ナワルの小石を取り出し、ボウルに入れ、水を注ぎ、洗う（かき混ぜる）。次いで、それらを取り出し水こしに移す。そして、ボウルの水をかける。再び、布にフリホル豆、小石像、ナワルの小石を戻し、包む。この作業を布包みの数だけ繰り返す。
- ・エレーナは小石を長老に渡す。介添え女性が、洗浄に使った水をコップに注ぎ、長老に渡す。
- ・エレーナと介添え女性は、長老とその妻の前に両膝をつく（写真26）。長老はメッセージを伝え、コップをエレーナに渡す。エレーナは、呪物を清めた水を飲み干す。
- ・長老はロウソク、布包みをエレーナに渡し、エレーナは、跪いてメッセージをもらう。
- ・介添え女性は、祭壇前にロウソクを4本たてる。祭壇に花びらをまく。
- ・介添え女性は、長老の前へ行きメッセージをもらう（巻末カラー④）。



写真25 ピシュラック（草花の一種）の供物の用意



写真26 チマンの長老から力を与えられる



写真27 祖母にあいさつをするエレーナ

12:24～ 儀礼の最後と祝福

- ・参列者らも祝いの言葉を伝える。
- ・祖母らが到着、エレーナは、跪きあいさつする（写真27）。
- ・介添え女性がかごに供物を入れる。
- ・エレーナと介添え女性は長老とその妻の前に行き、跪いて言葉を聞く
- ・2人は跪いたまま祭壇へ進み、祈りを捧げる（巻末カラー⑤）。
- ・2人が参列者一人ひとりにあいさつする。
- ・午前の室内での儀礼が終了。

13:22～ 食事

- ・昼食が全員に振る舞われる。牛肉のスープ、タマル、付け合わせにトウガラシを刻んだもの。

4-3 丘の聖地での儀礼

(1) 儀礼のプロセス

14:30～ ポコヒル山へ移動

- ・儀礼の参加者一同は、聖なるポコヒル山での儀礼のため、車で山の麓まで行き、そこから徒歩で山に登った。

15:10～ ポコヒル山で儀礼を開始

- ・儀礼の場にある4つの祭壇にそれぞれ祈りが捧げられる。祭壇を移動し、すべての祭壇の前で、跪いて祈る¹⁶⁾。4つの祭壇にそれぞれロウソクが4組（2本で一組）が立ててられる。

15:23～ ケマデーロ（供物焼き台）の準備と祈り

- ・ケマデーロに、バスクアル・アバッフでの儀礼と同じく、まず砂糖で十字を描く（写真28）。つづいて、香、ロウソクなどの供物を配置していく（写真29）。

15:40～ 主祭壇での祈り

- ・使用しているケマデーロに最も近い祭壇から中央にある主祭壇へ移動し、祈りが捧げられる¹⁷⁾（写真30）。
- ・祈りのあと、一同がチマンB師に続いて、一列になって楕円を描くように四方の祭壇をまわりながら、マリンバの演奏で、ソンのリズムに合わせて踊る。時



写真28 供物台に砂糖で十字を描く



写真29 供物を並べる



写真30 主祭壇で祈る。師は鶏をエレーナの頭につける

¹⁶⁾ 祭壇を前にして男性と女性では跪き方に違いがある。男性は左足のほうを跪いて、右足は前に出している。女性は両膝をつく。

¹⁷⁾ バスクアル・アバッフの主要祭壇と規模が類似している。ケマデーロは直径が140cm程度である。

計回りに三度（厳密には二度半）、反時計回りに三度周回する。エレナは生贄の鶏を抱いて踊る（巻末カラー⑥）。

15：50～ 鶏の供犠と祈り

- ・ケマデーロに来て、鶏（白色）に酒を飲ませる。その後、鶏の首をチマンB師が切り落とす。
- ・介添え女性が、鶏の体を持ち、血を火の中に入れる（写真31）。
- ・主祭壇のほかの供物を捧げる。茶色の鶏は使わず、一羽のみを捧げた。
- ・B師はケマデーロの側で様々な霊的存在を呼び出しながら、祈る。
- ・飲み物やスイカが配られて共食する。その間もケマデーロの側でB師はメッセージと祈りを捧げ続ける。
- ・ケマデーロに近い祭壇で介添え女性が鶏の体から足を切り離し、心臓やその他の内臓を取り出す（写真32）。
- ・切り離れた鶏の足、心臓、その他の内臓は主祭壇の裏側に介添え女性が埋納する（写真33）。

16：37～ 主祭壇での祈りと踊り



写真31 鶏の血をささげる



写真32 鶏を解体



写真33 鶏の心臓などを埋納

- ・主祭壇で、跪いて祈り、酒をまく。
- ・再び一列になって、マリンバの演奏にのって踊りながら、儀礼場を周回する。今度は、供物（布包み、木製十字架）をもって周回する。周回の仕方は一回目と同じ。
- ・主祭壇で跪いて祈り。儀礼の終了。

16：48～ 16：56 片付けと下山

- ・儀礼が終了し、素早く、持ち物を整理し、下山する。

(2) 儀礼の場

ポコヒル山の儀礼空間では、円形のケマデーロの数は、パスクアル・アバツに比べて少ない（図4）。しかし、基本的な祭壇の配置や規模については類似する。ただし、主祭壇と考えられるもっとも大きな祭壇を軸とすると東西にあるようである。南北パスクアル・アバツの祭壇・ケマデーロの配置が北東・南西にあるのとは違いがある。それでも儀礼に使用されたケマデーロを軸にすると北側に位置するケマデーロを使用しており、その点から言えばパスクアル・アバツとの類似性もある。

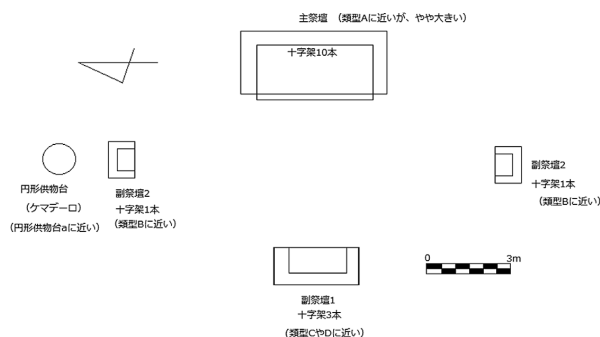


図4 ポコヒルの儀礼の場（作図：市木尚利）

5 マヤ信仰：多様な靈的存在、マヤ暦

5-1 多様な靈的存在

マヤ儀礼で、チマンは様々な靈的存在（パワー）に呼びかける。その呼びかけの内容を見ることで、彼らのパンテオンの構成、信仰のあり方がある程度知ることができる。Bunzelは、儀礼の最初の「呼びかけ」の対象を、その順番に沿って、以下のようにまとめている（Bunzel 1952：266-267）。

- 1 「神聖な世界」(Mundo)
- 2 自然現象：我らが父、太陽（まれに、我らが母、月）、四方、曇った空、冷たい風（世界の破壊的な力）、「世界の緑の肩、黄色の肩」（大地の生殖的な力）、昼の看視者と夜の看視者、空と大地と地下に行く者、山々と火山と他の地域の精靈
- 3 （カトリックの）聖人など：永遠の父、栄光のキリスト（教会におけるキリストのイメージ）、伝統の源、磔の丘（カルバリオ）におけるキリスト（十字架のキリストのイメージ）、罪人たちの聖人、「村の守護聖人」、サント・トマス、サン・ホセ、サン・セバスティアンのコフラディア、サンタ・アナ（妊産婦の守護者）、サン・ファン・パウティスタ（我らが光と星）、個人の運命の守護者たち、サン・ペドロ（鍵を持つ者、神聖なるものの守護者）、聖十字架（大地のシンボル）、教会の祭壇とコフラディアにあるすべての聖人たち、13-14の（数多くの）天使と使徒、「曇った空をめぐる天使たち」
- 4 偶像たち：古来の石像（山の祭壇にあるもの、個人の所有のもの、大地に埋められているもの、を問わず）
- 5 運命の力たち：12-13の月（複数）と星たち（時と運命）、神聖なる暦の260日と、個人の命のしるしとしての動物
- 6 死をもたらすものたち：「病と苦痛の主」とその従者たち、特別な病・毒・アルコール中毒・すべての暴力的な死・肉体的苦痛の神々
- 7 有用な活動の達人たち：農耕・織物・商売・産業・文書執筆・助産術・医学・占い・邪術などの守護をする神々
- 8 正義の主たち：亡くなったアルカルデ（村長・行政長、コフラディアの長など）、行政官・裁判官・教育者など、および「世界」における彼らの原型
- 9 死者の霊たち：「最初の人々」、普通の魂たち、（名前が憶えられている）その人自身の祖先

マヤの信仰の世界において「神聖な世界」を意味するスペイン語のムンド（Mundo:World）という語は、キチエ語の（呼びかけ）祈禱のなかで繰り返し発せられる。たとえば、「神聖な正義」が「大統領ムンド」、「大臣ムンド」、また、中央・地方の行政官の名で、呼びかけられる（ibid:264）。Bunzelは「キチエの（多神教的）汎神論に通底する、対立するものの全体的な統合の概念を代表する」ものだと解釈している。

5-2 人の運命を司るもの：マヤ暦

人はマヤ暦の日によって運命が定められると考えられている。チマンになれる人物は、その誕生の日によって決められている。

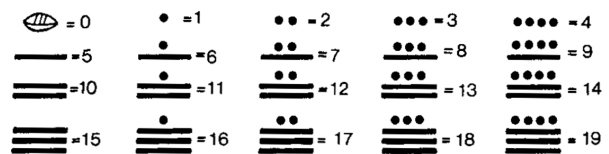


図5 マヤの数字（Whitlock 1976 より）

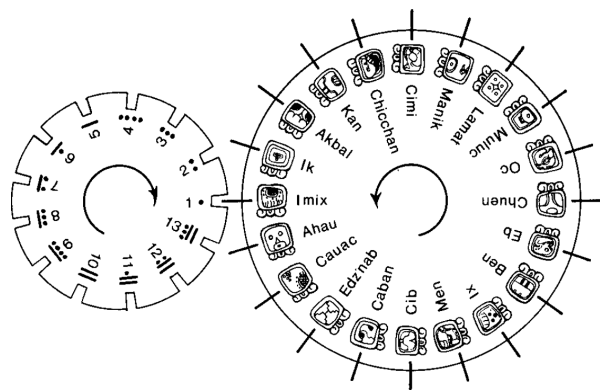


図6 ツオルキン暦（マヤ暦と同じ構成）の仕組み（Whitlock 1976 より）

マヤ暦は、20の日の名前（ナワル）と1～13の数字（20進法）の順列によって、260日のサイクルで構成されている（図5、6）¹⁸⁾。20の日の名前、語源的意味、象徴の意味について、Bunzelの聞き取り調査のデータから以下にその概要を記す（ibid:277-282）。（ここではキチエ語を正体で表記する。）

- ①バツ bats「糸」 過去との連続のシンボル、儀礼で体现される。良い日、儀式と祖先の慣習の永続の日。そこで、8のbatsの日に、我々がもつすべての儀式、とくに暦の儀式のすべてに感謝をする。

¹⁸⁾ マヤとアステカの暦は、この260日のサイクルと、太陽暦に近い365日（20日からなる18の月と不吉な5日）のサイクルの組み合わせ（最小公倍数）によって、18980（52×365）日のサイクルができる。この約52年のサイクルが重要な暦の周期となり、その周期の境目では重要な「新火」の儀礼が執り行われた（Miller1977:48-52）。現在使われているマヤ暦に関しては、実松克義がチチカステナゴの「マヤ文化援助センター基金」（Fundación Centro Cultural y Asistencia Maya）が発行しているマヤ・カレンダーの説明を要約している（実松2000:371-375）。

- ②エ ‘e「齒」 日の名前に体现される運命、すなわち誕生の日のシンボル。良い日で、人の個性と運命の日
- ③アフ aj「葦、主ないし達人」 ナグアルに体现される運命のシンボル
- ④イシュ ix（語源的な意味はない）地球（Mundo）の概念に体现される、宇宙の創造的な力のシンボル
- ⑤ツイキン tsiking「鳥」 物質的問題における幸運のシンボル
- ⑥アフマツ ajmaq「許し」 明確に定義づけられた特徴がない日だが、本質的に、懺悔の儀礼に体现される道徳的力のシンボル
- ⑦ノフ noj「個人の考え方もしくは習性」 人の心における両義的なモラルの力
- ⑧ティハシュ tijax（語源的な意味はない）喧嘩と悪い言葉の日。8のtijaxの日は、罪、特に妻や親族、とくに両親との喧嘩を告白するのによい日
- ⑨カワック kawaq（語源的な意味はない）死者の呪いに体现される悪のシンボル。恵みのない暴力的な日
- ⑩アフプ ajpu（語源的な意味はない）家の所有や炉に体现される、祖先の罰を与えるパワー
- ⑪イムシュ imux「神秘的なもの」 狂気のなかに表される宇宙の隠された力のシンボル
- ⑫イク iq’「偶像」 石彫に体现される宇宙の破壊的な力
- ⑬アクバル aq’bal「暗闇、夜」 人の心の中の悪のシンボル
- ⑭クアトゥ qat（語源的な意味はない）全般的な悪のシンボル
- ⑮カン qan「蛇」 宇宙の独断的な悪のシンボル
- ⑯カメ kamé「死」 すべての物事、善と悪の死における消滅のシンボル。許容のため、すべての物事のために許しを請うための日
- ⑰キエフ kiekj「鹿」 祖先信仰に体现される、姿を変えること、死における完結のシンボル
- ⑱カニル qanil「トウモロコシ畑」 トウモロコシの成長に示される、大地の再生、死後の再生のシンボル。播種と収穫に感謝する日
- ⑲トゥオフ t’oj「病」 罪によって引き起こされる苦しみのシンボル
- ⑳トゥシ t’si’「犬」 罪、とりわけ性的不純のシンボル

暦の数字も意味をもっている。1、2、3の小さい数字は、「穏やか」である。高い数字の11、12、13は「激しい」日で、これらは、防御、復讐、悪意の邪術の「強い儀式」のための日である。7、8、9の中間の数字は、中間の強さの日で、平穏な生活を確かにするための儀式を行う日である。

6 おわりに

本稿では、チマンによる儀礼、チマンになるためのイニシエーション儀礼の詳細なプロセスを報告したうえで、その内容を理解するため、チマンの「呼びかけ」の内容とマヤ暦についてまとめた。

チマンが祈祷で呼びかける諸々の霊的な力（存在）は極めて多様である。マヤの伝統に連なるものとしては、マヤの暦の日（ナワル）、自然現象、自然の場所・物、偶像、祖先、死者の霊などがある。一方で、キリスト教（カトリック）に係るものとして、神、キリスト、諸聖人、天使などがある。これらの2つのカテゴリーの諸要素は、単に併存しているだけでなく、様々な霊的な存在の一種の融合が見られる（以下はBunzel 1952:268）。例えば、征服者の守護聖人であったサントィアゴ（Santiago）はトウモロコシ畑の破壊者であり、「破壊的な風」と同一視され、サン・ファン（San Juan）は「われらが月と星々」と呼ばれ、人々を支配する運命の諸力と同一視される。また、サン・ペドロ（San Pedro）は、天国と地獄への扉の鍵をもつ者で、医療の達人であり、占師と邪術師の守護者である。

この2つのカテゴリーの共存と融合は、ラテンアメリカ全般に見られるシンクレティズム（宗教混淆）と言える。ただし、ラテンアメリカの他地域と比較しても、暦をはじめとして、その信仰の核心的な部分をマヤの「伝統」が占めていると言える。グアテマラの場合には、先住民の人口が過半数を占め、とくに中西部高地においては、先住民の人口比が圧倒的に高いことがその背景にあるだろう。さらに、グアテマラのマヤの場合、世俗的なパワーをもつ様々な存在、すなわち、スペイン由来の大統領、行政官をはじめとする幅広い職種が、霊的な存在に位置付けられていることも、固有の特徴と言える。

今回のグアテマラ訪問は、予備調査としての位置づけであったが、幸運にも、チマンになるためのイニシエーション儀礼を観察することができた。調査は2日間だけのごく限定されたものであったが、過去の研究と、4人の共同研究の利点がおおいに活かされて、充実した調査となった。とくに、チマンの諸師と、イニシエーションを受けたエレナ及びその関係者に信頼され、さまざまな知見を得ることができた。

時代が大きく異なる民族誌データと考古学データを安易に比較することは避けなければならないが、儀礼のプロセスや内容を知ることができない考古学の解釈のために、注意深く民族誌データを参考にすることに意味はあるだろう。また、考古学のデータが民族誌的解釈に役立つ部分もあるだろう。今回の調査では、儀礼のプロセスだけでなく、儀礼の場の配置などの基礎的なデータも得ることができた。その分析は、今後の課題のひとつである。

2020年度にグアテマラでの再調査を計画したが、新

型コロナウイルス流行により実現できなかった。そのため、調査と分析は不十分であるが、極めて貴重な事例であるため、早めに報告しておくことにした。この45年間には、内戦による破壊があった（歴史的記憶回復プロジェクト（編）2000、Smith、2006、池田光穂2020、本誌別稿を参照）。この内戦と復興のプロセスの過程で、マヤの信仰にも大きな変化が起こったはずである。その変化の過程も視野に入れ、引き続き調査と分析を継続していきたい。

参考文献

- 池田光穂2020『暴力の政治民族誌—現代マヤ先住民の経験と記憶』大阪大学出版会
- 稲村哲也1980「インディオ社会における聖者の祭とカルゴ・システム—グアテマラとペルーの事例から—」『ラテンアメリカ研究』10：65-102
- 小泉潤二1995「第1章 現代マヤ—状況と歴史」八杉佳穂（編）『現代マヤ—色と織に見せられた人々』財団法人千里文化財団、pp. 114-118
- 小林致広2018「薪になる木の豊かな場所」桜井三枝子編『グアテマラを知るための67章【第2版】』明石書店、pp. 16-20.
- 桜井三枝子2018「多様な人々と多様な文化 インディヘナとは、ラディーノとは」桜井三枝子編『グアテマラを知るための67章【第2版】』明石書店、pp. 30-34
- 八杉佳穂2018「インディヘナの言語 マヤ諸語・シンカ語・ガリフナ語」桜井三枝子編『グアテマラを知るための67章【第2版】』明石書店、pp. 292-296
- 歴史的記憶回復プロジェクト（編）2000『グアテマラ 虐殺の記憶』岩波書店
- レシーノス、アドリアン1977『ボボル・ブフ』中央公論社
- 実松克義2000『マヤ文明 聖なる時間の書』現代書林
- Bunzel, Ruth 1952 (third printing 1967) *Chichicastenango*

go: A Guatemalan Village. University of Washington Press.

De León y De León, Ángel Manolo 2010 *Municipio de Chichicastenango Departamento de Quiché, Diagnóstico Financiero Municipal*. Universidad de San Carlos de Guatemala, Guatemala.

Miller, Mary and Karl Taube 1997 *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames & Hudson, London

Smith, J. S. 2006 The Highlands of Contemporary Guatemala. *Focus on Geography* 49 (1) : 16-26

Thompson, J. Eric S. 1970 *Maya History and Religion*. University of Oklahoma Press

Whitlock, Ralph 1976 *Everyday Life of the Maya*. B. T. Batsford Ltd., London

Instituto Nacional de Estadística 2018 *Resultados del Censo 2018* (2020年11月1日)
<https://www.censopoblacion.gt/explorador>

謝辞

本稿は、文部科学省・科学研究費補助金・新学術領域研究（領域研究提案型）「出ユーラシアの統合的人類史学—文明創出メカニズムの解明」総括班（JP19H05731、2019～2023年度、代表松本直子）及びB01班計画研究「民族誌調査に基づくニッチ構成メカニズムの解明」（JP19H05735、代表大西秀之）の研究成果の一部である。この調査の遂行にあたっては、現地で多くの方々の協力を得ている。個々のお名前を記述することはできないが、衷心より謝意を表したい。

(2020年11月4日受理)



カラー① チチカステナゴ教会前：ここでもチマン（祈祷師）がマヤ儀礼を行う。



カラー④ チマンの長老から力を授かる：ロウソクなどの供物を受け取る受任者のエレーナ



カラー② パスクアル・アバッフの主祭壇：多様なロウソクが立てられている。



カラー⑤ 祭壇に祈りを捧げるエレーナと介添え女性



カラー③ 室内の祭壇：聖処女グアダルーベの両側に4体のサン・シモン像、その手前にナワルの小石などが置かれている。



カラー⑥ ポコヒル山の儀礼場：ソンのリズムで踊りながら周回し、清め、祈る。